



アグリビジネス学科同窓新聞

-発行-

秋田県南秋田郡大潟村字南2-2
秋田県立大学生物資源科学部
アグリビジネス学科
TEL 0185-45-2026(代)

印刷: (株)八郎湯印刷
TEL 018-875-4005

新型コロナウイルスの感染拡大の影響による諸状況を鑑み、第5号は特別紙面としました。
同窓生の皆さんも、大変な状況下だと思えますが、ピンチをチャンスと捉え、現状でもやれること、新しいイノベーションを見つけ出すことで、この難局を乗り切られることを望んでおります。



変革の時代

フィールド教育研究センター長
西村 洋

同窓生の皆様、昨年度からフィールド教育研究センター長を務めております西村洋です。今年の収穫作業もほぼ完了し、冬支度の準備に取り掛かっているFCから近況をご報告したいと思います。

今我が国の農業は農業就労者の減少や耕作放棄地の増加、さらには獣害の増加など、様々な課題を抱え、特に人口減少率トップの秋田県は、課題先進県とも言われます。地域に根差した農業研究、地域農業を先導する人材輩出を目標に掲げてきたアグリビジネス学科、その実践の場として位置付けられたFCについても、これまでに増して秋田農業への貢献が期待されているところと見られます。

センター(仮称:拠点センター)構想が3年前から検討され始めました。大学の中期計画に則った対応です。学内での基本構想の検討、学外有識者を含めた設立準備委員会における設置方針の検討を経て、昨年8月以降、知事説明、議会説明がなされ、今年4月1日以降拠点センターを立ち上げる事が決まりました。

今年度も作物栽培、家畜飼養とも順調で、お米を中心とする収穫作業も完了してそろそろ冬支度に入りました。冬到来といえ、昨年からの冬季の野鳥観察を希望する方が増え始めています。大潟村は国指定大潟草原鳥獣保護区となっており、昔から野鳥観察の

フィールド教育研究センター2020年度スタッフ



フィールドとして一部の方々には有名だったようですが、近年SNSなどでも頻りに情報交換がなされているのか、FC内への立ち入りを要望されるようです(現時点では業務に支障がないので許可しています)。卒業生の皆さんも、改めて出身大学・学科の特色を再確認してみたいかがですか?

各プロジェクトの近況

先進作物生産技術開発プロジェクト(旧大規模農業経営プロジェクト)

今年度もそろそろ冬の足音が聞こえてくる頃となってきました。幸いにも、先進作物生産技術開発プロジェクトの教員は特に変わりなく過ごしております。今年を振り返ってみると、兎に角〇〇に振り回されてきたという印象です(多分この記事にも登場しているのですが、この3文字は絶対に書きません)。前期の授業がZOOMを利用した遠隔授業に変わり、実習はオンデマンドのビデオ視聴に変わり、授業開始が遅れたおかげで夏休みの前半が授業に変わってしまし、新入生歓迎会はなくなり

先進園芸技術開発プロジェクト(旧園芸作経営プロジェクト)

2020年3月、例年通りに、新3年生がFCに集合して、新4年生、大学院生の指導を受けながら、花苗の鉢上げや野菜の播種等を行いました。ここから園芸プロの2020年度がいつものように始まるはずでした。4月、植物は順調に成長していくのに、授業はなかなか始まらず、ついにオンラインによる遠隔授業でプロジェクト活動をやっていく事になりました。菜の花まつりは中止になり、花苗はほとんどが廃棄処分となりました。

家畜資源利用推進プロジェクト(旧家畜資源循環農業経営プロジェクト)

今年度は、佐藤勝祥が担当いたしました。今年度の畜産プロジェクトは教員4名(横尾准教授、渡邊准教授(FC)、伊藤助教、佐藤)と3年生6名、4年生6名、大学院生(修士)3名で活動してきました。ここ数年、毎年のように大学院へ進学する学生がおり、中間報告会や文献ゼミでは活発な議論が行われ、学生による学会発表も増えているなど、プロジェクトの研究活動が盛り上がりつつあります。

ました。実際に新入生の顔を生で見たのは、後期の化学実験の時間が初めてでした。おかげで新入生の顔と名前は一致しませんでした。愚痴っぽくなりましたが、植物はそんな人間界とは関係なく、イネもコムギもダイズもいつもと変わらず育ち(FCの職員さんが頑張つて、休まず農作業をこなしてくれたおかげですが)、今年度の酒米は久しぶりの特等となりました。このまま誰も感染せず、暖かい春が来て、〇〇も居なくなってくれる事を願っています。

待ちに待った対面実習が一部解禁になりました。当たり前のようにFCで実習をやれるということが、いかに幸せなことなのかと実感しました。後期からは全授業を対面で進めています。3年生9人は、前期の遅れを取り戻すべくプロジェクト活動に邁進しています。4年生8人と院生1人は、緊急事態宣言下でも苦勞しながら研究を進め、まもなくラストスパートに向かいます。客員研究員1人と教員4人も例年通り頑張っています。

同窓生の皆さんも大変な状況下と思いますが、どうか頑張ってください。神田 啓臣 記

重要なお知らせ - 拡散のお願い -

アグリビジネス学科同窓新聞は第4号からはWeb掲載のみとなっています。同窓の仲間たちに「同窓新聞をWebで閲覧すること」を拡散してください。
アクセス方法「秋田県立大学HP→アグリビジネス学科HP→アグリビジネス学科運営ページ→キャリア・就職→同窓新聞」。
なお、印刷された同窓新聞の配達を希望される方は、kanda@akita-pu.ac.jpまでご連絡ください。
(次号は令和4年1月頃にWeb公開予定です)

*各プロジェクトの近況報告は2面に続きます。
佐藤 勝祥 記

荒樋 豊先生を偲んで

荒樋 豊先生は、かねてより病氣療養中のところ、令和2年8月29日に逝去されました。故人とゆかりの深い地域ビジネス革新プロジェクト（アグリビジネスマネジメントプロジェクト）の教員、同窓生、在校生から追悼の言葉をよせていただきました。故人のご冥福をお祈りします。

荒樋先生を偲んで

教員 津田 渉

私が荒樋先生のことを存じ上げるきっかけは荒樋先生が主な著者である「祭り」で輝く地域をつくる（1998）に出会ったことでした。私も荒樋先生も当時は農水省のサテライトボディ（外郭団体）にあたる研究機関にありました。お会いすることはあまりありませんでしたが、「地域活性化や地域づくり」についてそれぞれの手法でアプローチしていました。私としては「こういう研究領域から地域づくり」を見ることもできるのかと、とても新鮮で刺激的な印象を持ちました。

同じ大学の同僚になつてからも、先生の活動や研究は斬新で、社会活動を兼ねた業績をいただくときには「すごい」という驚きが多かったです（例えば、三種町との協力から生まれた「じゅんさい物語」など）。教育実践では本学科のプロジェクト教育の一つの方向性を示してくださり、また、文科省の事業を活用した様々な教育活動（能代市常盤地区での学生が大きく関与した農村再生活動）や科目（秋田地域学）の立ち上げに尽力されました。荒樋先生は秋田県にグリーンツーリズムを普及させ、コミュニ

ニティ再生の活動に大きく貢献されました。先生は「ぐいぐいひっぱるリーダー」でしたので、時には学生たちや地域の皆さんと意見が合わないこともあったかもしれませんが、その大きな足跡は消えることなく刻まれています。改めて、衷心よりご冥福をお祈りいたします。

恩師

2期 見上 歩

青天の霹靂。あまりにも突然の訃報に耳を疑った。荒樋教授には、入学直後から色々とお世話になり、自然と直属のプロジェクトを志願していた。

農家民宿・レストラン、各地のイベント、グリーンツーリズムのフォーラム等へ赴き、生の声を聞き、地域と一体となって活動に取り組む。振り返ってみれば、在籍中は各地を飛び回り、本当に貴重な経験をさせていただいた。

だが、行動を共にすることが増えるにつれ、当時の私は世間知らずなうえ生意気だったため、教授の言動・行動が理解できず、反発し対立し、次第に避けるようになってしまった。それ以来、そのまま疎遠になっ

てしまっていた。唯み合っていたとはいえず、大変お世話になったのにも拘らず、失礼で親不孝であったと、当時の自分の行動に今は反省・後悔が絶えない。社会人生活の中で、人を知り世間を知り、色々な経験も重ね、当時の教授の言動・行動も理解できるようになった矢先の訃報だった。

12期(4年生) 小鍛冶 航

荒樋先生からいただいたご恩に深く感謝して、地域ビジネスプロジェクトの学生を代表して一言述べさせていただきます。

大学1、2年次では講義を中心にお世話になり、専門分野である農村社会やグリーンツーリズムに関する背景や変化などの基礎を教えていただきました。

3年次になると、プロジェクト活動で農村社会について文献調査・現地研修で大変お世話になりました。現地研修では農村の文化や伝統について説明していただき、地域ビジネスとの関連性について教えていただきました。また、プロジェクト活動のまとめでは忌憚ないご意見をいただき、よりよいまわができたことを鮮明に覚えております。プロジェクト学生と津田先生、酒井先生、林先生方と昼食会をした際には、体調が優れていない中でも優しい笑顔を見せて

ました。我々卒業生には心配させないため病状を伏せ、病床で最期の執筆活動をしていただけで、涙が溢れた。並大抵のことではない。命を燃やして、荒樋教授は、自分が歩んできた足跡を残したのだ。

また、我々卒業生には心配させないため病状を伏せ、病床で最期の執筆活動をしていただけで、涙が溢れた。並大抵のことではない。命を燃やして、荒樋教授は、自分が歩んできた足跡を残したのだ。

話を聞けば聞くほど、あらためて教授の偉大さを思い知らされた。

「荒樋先生、生意気ばかり言って世話の焼ける学生で、すみませんでした。そして、貴重な経験を積ませていただいたこと、沢山の人が出会わせていただいたこと、本当にありがとうございます。ご冥福をお祈り申し上げます。

次世代農業基盤創成プロジェクト(旧生産環境プロジェクト)

今年度の次世代農業基盤創成プロジェクトは、この3年間、増本、近藤・永吉両准教授の3名体制で運営しています。現在所属する学部生・院生は、修士2年2名(社会人1名は9月修了)、修士1年生1名、4年生7名(1名は9月卒業)、3年生8名です。4年生の進路内訳は、本学大学院1名、国家公務員3名、地方公務員2名、自営業1名です。最近では国家公務員を蹴って地方公務員を選ぼうとする者が多い中、ある一人は指導教員や県庁人事担当者の想いを袖に、国家公務員を選びました。本人いわく、海外大使館勤務の可能性に惹かれたとか。

3年生時のトンレサップ湖現地調査と日本国大使館のアタッシェ(一等書記官は我々の分野派遣)訪問がその原因でないことを願っています。直近の基盤プロは、第一志望とする2年生の人数が専攻上限を超えるような嬉しい状況ですが、もちろん先輩達が実現していない、大手民間建設会社や大学等の研究職への挑戦も期待するところです。

さて、本プロジェクトの特記すべき出来事は、永吉准教授が加わる研究グループがドローンを用いた上空の温室効果ガスの国内初観測に成功したこと、増本の日本農学賞・読売農学賞の受賞です。共に、所属学生・卒業生や本学同僚教員のお陰と感謝する次第です。

増本 隆夫 記

地域ビジネス革新プロジェクト(旧アグリビジネスマネジメントプロジェクト)

同窓生の皆さんこんにちは。コロナ禍の影響で大変なことと思います。大学も前期は慣れないオンライン授業で講義やゼミを実施しました。大変残念なお知らせですが、荒樋先生が昨年8月にご病氣のためお亡くなりになりました。ご冥福をお祈りします。特集記事「荒樋 豊先生を偲んで」もご覧下さい。2013年度からプロジェクトの代表を務めてこられた津田先生は昨年度で定年を迎えられましたが、今年度まで教育を担って下さっています。林先生は今年度から准教授に昇任され、教育にもますます力が入っています。プロジェクトの代表は今年度から私(酒井)となりました。

4年生は5名で、オーナー制農業、地域産品の経済効果、農村レストラン、ジェンダー問題、買い物弱者対策などをテーマに卒業研究に取り組んでいます。3年生は6名で、地域農業を守る農協の役割、SDGsと飲食店、地元産物を生かした地域振興としての商品開発活動などの学修に取り組んでいます。夏休みには3・4年生一緒に、放牧養豚と畜産加工と飲食業に取り組む県内の事業者を視察しました。

先日、ある同窓生から転職の連絡をもらいました。嬉しいことでも困ったことでも是非連絡を下さい。

酒井 徹 記

政策・経営マネジメントプロジェクト(旧農業政策研究プロジェクト)

令和2年度は着任3年目の高津が報告させて頂きます。今年度は、3年生5名、4年生5名、大学院生2名、教員5名の計17名で活動しています(教員の異動はありません)。大学院生の加入が学部生へ良い影響を与えている証左か、近年大学院への進学希望者が増えています。大学院生には、高度な専門知識と分析能力を身に付けてほしいと願っています。

今年度は良くも悪くも新型コロナウイルスに影響されました。前期の活動は遠隔対応となり、3年生は連日の輪読ゼミで夜遅くまで報告資料を作っていました。その甲斐もあり文献学習による知識は定着してきたと感じます。

後期には3年生ゼミの新たな単元として、計量経済学を専門とする赤堀先生による「アンケート調査実習」が開始されました。コンジョイント分析によって県立大生の農産物購入要因の解明を試みています。

4年生の卒業調査も断られてしまうなどの逆境もありましたが、めげることなく、卒業完成に向けて研究を進めています。

政経プロ学生の全員が笑顔で卒業できるよう、教員一同、より引き締めて指導を行っていく所存です。

高津 英俊 記